

「英語教育改善プラン」に基づいた教員の英語力・指導力向上に向けた取組 平成26～30年度「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」～埼玉県～

課題とその分析

- 新学習指導要領を見据えた児童生徒のコミュニケーション能力の向上
- 外部機関と連携した研修体制の構築と教員の指導力向上

具体的な取組の内容

○小学校における取組

- ・1単位時間の活動を補完するモジュール学習の研究
- ・既習表現を効果的に使ったフリートーク活動(話すこと)の研究

○中学校、高等学校における取組

- ・帯活動を効果的に活用したライティングの授業改善
- ・生徒により多くの英語を使わせる工夫(ラウンドシステム)
- ・研究開発員による協調学習の実践(東京大学CoREFとの連携)

成果の波及・周知について

◎VTRを用いた研究協議会

・帯活動に焦点を当てて指導方法の工夫改善の研究を進めた学校については、活動時のVTRや生徒の作品などを編集したものを紹介して、効率よく周知した。

◎書籍等での広報

・研究の過程や成果及び他校への普及の状況などを、研究の中心となった市教育委員会や教諭が書籍や雑誌、学会等で発表する等、県内のみならず、全国にも波及させることできた。
〔『3分英作文の指導アイデア』『5ラウンドシステムの英語授業』〕

成果① 生徒の変化

◎求められる生徒の英語力の向上

H25		H30
37.1%	⇒	45.0%

※H30年度研究委嘱の市町の平均は52.5%とさらに高い。市町管内での普及も進んだ。

◎研修協力校と他校生徒の伸びの比較

英検IBA:2年生から3年生への平均点の伸び

○研修協力校(ラウンドシステム)
659.7(H27)→738.9(H28) **79.2ポイント↑**

●研修協力校ではない中学校
673.3(H27)→719.0(H28) 45.7ポイント↑
研修協力校で33.5ポイント伸びが高い。

成果② 教師の変化

◎フリートーク活動を通して児童の関心が向上

研修協力校で「話すことが楽しい」と回答した児童が9割超となった。

◎授業における活動時間の増加

ラウンドシステム導入前	導入後
	平均20分⇒平均35分

※教師の説明する時間が減り、生徒の言語活動の時間が増えた。

◎協調学習の普及

高校においては知識構成型ジグソー法を用いた授業を研究し、4技能の統合的な活動の実践が多く積み重なった。

課題解決のための手立て

- △小学校の早期化教科化に対応できる指導力の一層の向上と評価に関する周知徹底。それに伴う校内研究の推進
⇒研修の実施と普及の見届けを推進する。
- △話すこと(やりとり)の充実
⇒研修協力校での研究成果等を踏まえて、話すこと(やりとり)を軸に校種間の接続について研究を推進する。
- △CAN-DOリストのさらなる活用
⇒新学習指導要領全面実施に向けて評価の在り方を研究し、校種間で一貫した指導と評価の研究を推進する。

平成30年度「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」 ～草加市立氷川小学校～

現状の課題と課題解決のための手立て

・平成30年4月の段階において、担任がT1として授業することやALTとのチームティーチングの授業スタイルが定着していなかった。そこで、研究組織として、授業研究部、調査環境部、教材開発部に分け、教職員が一丸となって研究を推進した。教師の英語力や指導技術の向上のため、校内研修を一層充実させた。

具体の取組の内容

① 授業研究部

- ・年間指導計画の見直し
- ・全学年E-timeの設定



1年生
E-time

- ・Review Talk (FreeTalk)の研究
既習の表現を使って
会話する。
30秒・1分(ペア)



② 調査・環境部

- ・English Room の環境整備
- ・児童の実態調査(意識・学力)と分析
G-TEC junior4技能調査の実施



授業
スタイル
統一

③ 教材開発部

- ・フォニックス、バナナチャンツ(E-timeで使用)、読み聞かせ本等
- ・フラッシュカード作成
- ・英語集会企画

④ 草加市独自の副教材の活用

- ・言語活動の充実
- ・振り返り時間の確保

⑤ 校内研修の充実

- ・月1回の研修会・研究授業

⑥ 教師の英語力の向上

- ・サテライトでの英会話強化
インターネット回線で英会話



成果①

・外部試験G-TEC junior5月の6学年平均スコアは、305.5点でレベル3の「馴染みのある表現を自分なりに使う」レベルであったものが、11月の実施では、368.8点でレベル4の「まとまりのある英語を使い始める」レベルに変容を遂げ、高い水準となった。

実施月	トータル	「聞く力」	「読む力」	「話す力」	「書く力」
5月	305.5	79.7	68.5	81.3	75.9
11月	368.8	102.9	80.9	94.5	90.5
差	63.3	23.2	12.4	13.2	14.6

・レビュートーク(フリートーク)の積み上げにより、自然に英語が出てくるようになり、お互いに英語で話せることが実感でき、話すことが楽しい、と答える児童が9割を超えている。

成果②

【児童の変容】児童が英語を発話することを楽しんでいて、自分の言葉として話すことができてきた。間違いを恐れず、積極的に発話を楽しんでいる。

【教師の変容】自信を持って、ALTと授業を進めることができています。クラスルームイングリッシュを使用して、ほぼ、オールイングリッシュで授業を進めることができてきている。

【指導主事から見た変容】校内研修においては、非常に活発な意見が出て、教師が英語を楽しんで指導法を見出している様子が伺えた。多くの質問が飛び交い、大学の先生の指導をスポンジのごとく、吸収しようとする教員集団と変容していた。

今後の課題・方向性

- ・研究の推進により、授業スタイルが確立され、教師同士の情報交換から、PDCAサイクルにより、常に改善策を見出していくことができてきた。
- ・「聞くこと」「話すこと」の活動が充実してきた。「書くこと」における共通の研修が必要であると感じる。
- ・全面実施に向け、教育課程の整備や年間指導計画の見直しが必要である。
- ・小学校外国語・外国語活動のCAN-DOリストと中学校英語との連携をさらに研究していく。
- ・E-timeの計画的な実施と年間計画の位置づけ。
- ・評価の在り方の研究。
- ・教師の英語力が向上できるよう、市教委とも連携して、教員研修も継続して進めていく。

現状の課題と課題解決のための手立て

・埼玉県学力学習状況調査では、全ての領域において、県平均を1.1ポイントから1.9ポイント下回っており、特に表現の能力に課題があった。そこで、CAN-DOリストの運用と見直し、言語活動の統一、パフォーマンステストの実施、自己評価シートの活動と振り返り等を実践した。

具体の取組の内容

① CAN-DOリストの運用と見直し (草加市CAN-DOリスト策定)

Grade	到達時期	評価の観点：外国語 理解の能力		評価の観点：外国語 表現	
		聞くこと	読むこと	話すこと（やりとり）	話すこと（発表）
3rd	卒業まで	日常生活の身近な話題に関する話や、簡単なアナウンスなどを、ゆっくりに話されれば、その概要を理解できる。	他人の話・物語やノンフィクションを、音や注釈を参考にしながら読んで、文章の概要を理解できる。	過去や未来の日常生活の身近な話題について、つなごうことや相づちを使いながら論理的な対話を続けることができる。	これまでに習った文法事項などを使って日本のことや将来の夢などの自己PRの文程度で紹介することができる。
Grade 9	3年3学期終了時	卒業への思い、将来の夢などのメッセージを聞いて、ゆっくりに話されれば、その概要を理解できる。	卒業への思い、将来の夢などのメッセージを読んで、その概要を理解できる。	中学校生活で頑張ったこと、卒業に向けた思い、将来の夢などについて、お互いに伝え合い、対話することができる。	中学校生活で頑張ったこと、卒業に向けた思い、将来などについて、論理的に紹介することができる。
		Special Project	Special Project	Special Project	Special Project
Grade 8	3年2学期終了時	簡単なアナウンスで、ゆっくりに話されれば、重要な情報を理解できる。	文化の紹介やホームページ上の文を読んで、その概要を理解できる。	友達やALTと電話での会話などを通して、簡単な録音や文を用いて即興で伝え合うことができる。	関心のある事柄（日本のや弊）について、考えなどを、簡単な録音や文を用いて話すことができる。

② 帯活動「Free Talk」

- ・自由英会話
- ・テーマをもって会話
- ・グループでの会話
- ・会話の内容の書き取り等



③ 草加市独自の副教材の活用

- (自己表現活動・振り返り)
- 「話すこと」で用いた内容を「書く」活動でもアウトプットする。



④ センテンスマラソンの実施

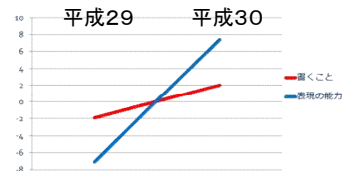
「話すこと」を「書くこと」につなげる活動

- ・Activityなどで使用した英文を記入
- ・Free Talkにおけるメモ
- ・1文英作文
- ・1000文書く。発達段階に応じて「書き写す」から、自己表現活動へ



成果①

・平成30年度埼玉県学力学習状況調査の結果から、教科の領域である「書くこと」が県平均よりも2ポイント上回り、外国語表現の能力は7.4ポイント上回る結果となった。



・外部検定試験の結果

比較集団	英検3級取得生徒数	英検3級取得率
H29第3学年	57人	33.1%
H30第3学年	66人	39.2%

成果②

- ・【生徒の変容】言語活動の充実により、発話した内容の文構造が理解でき、それを「書くこと」によって、定着を図ることができた。さらに、「書くこと」に対するフィルターが低くなり、文章をペンを止めることなく、書くことができるようになった。
- ・【教師の変容】共通の活動を全学年行ったことで、若手教員とベテラン教員とが情報交換を密に行いながら、PDCAサイクルにより、より良い授業スタイルの確立を目指すことができた。
- ・【指導主事から見た変容】直接大学教授からの指導により、自信と根拠を持って研究を推進し、生徒の変容が教師の授業スタイルの変容へと導いていた。

今後の課題・方向性

- ・研究の推進により、授業スタイルの方向性が確立され、教師同士での情報交換から、PDCAサイクルにより、常に改善策を見出していくことができてきた。
- ・「書くこと」の領域や「表現の能力」に大きな成果が見られたが、「読むこと」の領域や「外国語理解の能力」にまだ、課題が見られる。
- ・パフォーマンステストの計画的な実施により、さらに「話すこと」の評価を充実させていく。
- ・CAN-DOリストの運用により、教師の指導を振り返り、生徒の「できること」が確実に身に付いているかを確認する。さらに、生徒自身が「できる」と実感できるよう支援していく。
- ・教師の英語力が向上できるよう、市教委とも連携して、教員研修も継続して進めていく。

平成30年度「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」 ～坂戸市立大家小学校～

現状の課題と課題解決のための手立て

話すことが苦手！

- 1 聞き合い、伝え合う力の育成する
- 2 日本語と英語の発音の違いに気付くことや、コミュニケーションの楽しさを体験する
- 3 「話したい!」「聞きたい!」と思わせる活動を設定することで、相手を意識したコミュニケーションが活性化する

具体の取組の内容

- ①児童へのアンケート調査を実施する。
- ②大家小英語教育活動のグランドデザイン作成する。
- ③指導者を招聘し、研究授業を通して、課題を明確にしながらか研究を推進する。
- ④ALTとの連携を大切に、外国語主任(中央研修生)を中心に指導案を作成していく。
- ⑤英語活動を振り返るチェックポイントを活用し、教師が互いにチェックしながら次の授業に生かせるよう工夫・改善していく。
- ⑥中学校との連携を深めていく。(小・中の教育課程の連携、互いの授業公開等)

＜3つの段階の「きく活動」を大切にする＞

- ◇聞<(hear)>・・・音や声を耳で感じ取り、大まかな情報を得ること。
- ◇聴<(listen)>・・・注意深く話に耳を傾け、内容を理解しようとする。
- ◇訊<(ask)>・・・疑問に思ったことをはっきりとさせたいから訊く。
自分の考えを伝えたり、相手の考えを受け止めたりする。



《英語活動を振り返る check point !》

- 全員がコミュニケーションを取れているか
《教師や特定の子供が話すのではなく、全ての子供が情報や気持ちを伝え合い、聞き合っているか》
- 友達とのかわりは生まれているか
《互いに理解を深め、新しい関係が生まれていくような活動になっているか》
- 全人教育としての学びになっているか
《英語の表現だけに目が向き、相手を思いやったり、気持ちを込めたりすることを大切にしているか。教育に不適切な題材を選んでいないか》
- 自己表現の工夫はあるか
《「伝えたい」という気持ちを持てるよう、自分についての話題を入れられ、目的のある活動になっているか》

成果①

①4, 5, 6年生に英語アンケート実施

- ・英語に興味・関心がある・・・80%
- ・英語のコミュニケーションが楽しい・・・68%
- ・英語の授業が楽しみ・・・80%
- *高学年になるにしたがって、英語に対する苦手意識が高まり、興味、関心が低くなっていた。

②英語指導力向上研修後

- ・英語に興味・関心がある・・・90～92%
- ・英語のコミュニケーションが楽しい・・・80%
- ・英語の授業が楽しみ・・・90～92%
- *本校の実態として、「聞くこと」「書くこと」は比較的好きだが、「話すこと」に苦手意識が強い。
→研修を進め、実践を重ねていくと児童に変化が出てくる。

成果②

①教員・管理職から見た児童の変容

- ・色、曜日、外国の名前、代表的な食べ物等を覚えて、簡単な会話ができる。
- ・ALTや教師の英語の指示が理解できる。
- ・友達とのコミュニケーションを英語を使って楽しみながら会話ができるようになってきた。
- ・指導者の適切なアドバイスと中央研修生のリードにより、苦手意識を払拭して児童も教員も楽しめる実践となった。

②保護者から見た児童の変容

- ・保護者が受けてきた英語授業との違いに驚き、小学校の英語教育への理解が深まった。

③指導主事から見た研修協力校の変容

- ・中学校に見せたい実践となった。取り残されていると感じる児童生徒がいないように、事前に手立てを用意することが大切である。

今後の課題・方向性

- ①質問の仕方や発音、ジェスチャーなどを十分に練習してから発表すること、即実演(デモ)発表に関しては、どちらもメリット・デメリットがある。
《練習を十分にしてから身に付く力》
→「話すこと(発表)」の正確性を養える。
《即実演(デモ)発表で身に付く力》
→「話すこと(発表)」及び「話すこと(やりとり)」の即興性を養う。
⇒身に付けさせたい力(ゴール)に合わせて活動を選ぶ。
- ②身に付けさせたい力(ゴール)は、本時のねらい・単元目標・大家小を卒業する時に求める理想的な児童像と授業内容に整合性があるかを確認する必要がある。
- ③今後の課題として、発話している児童の割合が低い活動の時に、教員の支援によって「取り残されている」と感じている児童がいないように工夫・改善していく。

平成30年度「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」 ～坂戸市立若宮中学校～

現状の課題と課題解決のための手立て

- ・中学入学時点で英語に苦手意識を感じる生徒がいる。
→相手を大切にすることを高め、間違いを恐れず相互理解を深めながら言語活動が行われる授業づくりを行う。(ペア・グループでの学び合いを主として行う)
- ・「聞くこと」に関しては、ある程度の力があるが、「話すこと」「書くこと」に対しての力が弱い。特に自己表現を苦手と感じ、英作文の自己表現ができない生徒がいる。
→「話すこと」「書くこと」における発信力を強化する言語活動を充実させて、自分の考えや思いを適切な英語で表現させる指導を実践する。

具体の取組の内容

【本校英語科の授業を受ける心構え】

- ①予習は必ずしてこよう。(新出単語の意味を調べ、本文を写してくる)
- ②授業中はしっかり集中して英語をたくさん使おう。
- ③ALTと積極的に話そう。(休み時間なども)
- ④その日に習ったことを復習しよう。
- ⑤英語は慣れることが大切。繰り返し練習しよう。(読み、書き、聞き、話す)

○学習形態の工夫

- ・指導のねらいに応じて一斉学習、ペア・グループ学習、個別学習など多様な学習形態で授業を行う。

○統合的な言語活動を通じた表現力の育成

- ・帯活動や新出文法導入時のインプット活動、アウトプット活動などでQ&AやSmall Talk, Small Debateを段階的に取り入れ、相手を意識しながらやり取りをする活動を通して即興性のある表現力を身につける。
- ・Story RetellingやRe-Productionなど、文章の内容を整理し、行間を読み、さらに自分の考えも含めて表現できるように深めていく。また、相手にわかりやすく伝えるという目的意識をもって言語活動を進めることによって、互いの表現力を豊かにする。

○Can-Do リストの活用

- ・Can-Do リストの見直しを行い、各単元の目的を具体的に生徒に示すことで、学習意欲の向上を図る。



成果①

平成30年度埼玉県学力学習状況調査

【中学2年生】

本校 63.6(8-A) 県65.4(8-A)

聞くことに関しては、73.5で県の72.9を上回るが、書くことでは58.7で61.8の県を下回る。また、言語や文化についての知識・理解も54.8で59.5を下回る。

【中学3年生】

本校 58.1(10-C)

※平成29年度同集団の結果 57.5(8-B)
同集団における学力の伸びが大きく見られた。また、昨年度は全ての項目で県平均を下回ったが、本年度は「聞くこと」や「外国語理解の能力」において、県平均と同等、またはそれ以上の成果を上げている。

成果②

【生徒】

授業で間違いを恐れず積極的に発言する生徒が増えた。歌を意欲的に歌ったり、ペアでの活動では表現を変えた問答をするなど、自己表現することの楽しさと、他の生徒の考えや思いを受け入れる授業の雰囲気が出た。

【教員】

教科部会を行う回数が増え、各自の教材研究の共有化、お互いの授業の課題や工夫点の話合い、積極的な授業参観を通して、指導方法の工夫・改善を図ることができた。

【管理職より】

中学校3年間の学習の継続性をこれまで以上に意識した授業を実践するようになってきた。また、学び合いの視点を入れた授業を取り入れた授業展開を全学年で行っているため、指導法についても共通性が図られるようになってきた。

今後の課題・方向性

本年度、小・中学校間の連携を推進した。今後、小学校から中学校へのスムーズな外国語学習の流れを作り、それを高校へとつなげていくことが大きな課題のひとつである。本校は2つの小学校から児童を受け入れるため、3校での共通の目標や授業の取組などの情報交換を密に行っていくことが大切である。現状の課題にもあるが、中学に入学した時点で英語を苦手と感じる生徒がいなくなるよう、小・中学校での連携をより深めていく必要がある。現在小学校で始められている「書き取り練習」や「フォニックス指導」は、文字と音との関連性を早い段階から理解させる上で有効であり、中学校での音読指導へ円滑な連携が期待できる。教科を好きになること、興味を持つことが、各技能(読む、書く、話す、聞く)の力を引き上げていくための素地であると考えられる。主体的、対話的で深い学びの実践に向け、今後も「学び合い学習」を基盤とした授業の研究を重ねていく。

現状の課題と課題解決のための手立て

・授業の楽しさの質を向上させるために、教師の英語力・指導力を向上させ、「自分の考えや思いをもち、それらを主体的に伝えられる喜び、理解できる喜びを味わえる授業づくり」をめざす。

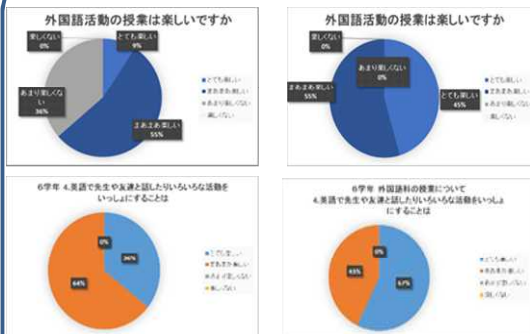
具体の取組の内容

- ①教師が担任主導の「外国語」の授業ができるようになるための、学習指導要領「外国語活動」の趣旨を踏まえた公開授業・研究協議会の実施
- ②教師の英語力・指導力の向上をめざした、英語教育推進リーダーを主にした示範授業と職員研修の実施
- ③ALTと連携し、児童が自分の思いや考えを伝え合い、自分の言葉で授業を振り返る場の設定による、児童のコミュニケーションに対する関心・意欲を高める効果的な活動・場面の設定



伝え合う喜びを味わえる活動の充実

成果①



- ①教師自身が主体的に「楽しく」授業を実践できるようになった。
- ②児童の授業の中でのコミュニケーションに対する関心・意欲が向上している。

成果②

- ①児童が「理解できた、話すことができた」という達成感を味わえる授業が実践できた。
→授業の楽しさの質が「ゲームの楽しさ」から「伝えられる喜び、理解できる喜びを味わえる楽しさ」へと変容した。
- ②教師の英語力・指導力の向上
→ジェスチャー等の視覚化の工夫、温かな雰囲気でのスモールトーク、クラスルームイングリッシュ等、英語を使おうという意識が向上し、担任が英語を教えるメリットを最大限に発揮できるようになった。
- ③担任とALTとの効果的な連携
→ゲームの説明、発音確認、実際の児童の活動へのALTの参加等、効果的な役割分担ができるようになった。

今後の課題・方向性

- ①学習内容の充実に伴う英語の学習に難しさを感じる児童の増加
→特に書く活動に難しさを感じる児童の増加
- ②担任のさらなる授業力・指導力向上をめざした授業に生かせる様々な活動の実践的な研修の継続と積み重ね
- ③児童ひとりひとりの意識の変容や伸びを見取る評価方法の工夫
- ④CAN-DOリストの内容項目等のさらなる検討と効果的な活用方法の工夫
- ⑤担任の英語力向上をめざしたALTとのさらなる効果的な連携の在り方

現状の課題と課題解決のための手立て

- ・現状の課題：生徒のコミュニケーション能力の育成
- ・手 だ て：音声を重視したコミュニケーション活動を軸とした授業改善

具体の取組の内容

- ・東京学芸大学金谷名誉教授を招き3度の英語科校内研修(1度は全職員参加)
- ・東京学芸大学金谷名誉教授、埼玉県教育局北部教育事務所指導主事を指導者とし、秩父地区中高英語研究連絡協議会と連携した公開授業研究協議会を実施。(対象:秩父郡市小中高英語科担当教員)
- ・研究発表会は、北部教育事務所管轄小中高等学校対象に2月15日実施予定。(参加予定60人以上)



成果①

- ☆3年生英検3級以上取得者
昨年度:29%
→今年度:32%
(今年度のCEFR A1相当レベル以上の取得率49%)
- ☆生徒が授業中に英語で活動する時間の増加
年度当初約30%
→現在約60%と増量

成果②

英語による発問・指示、生徒の発言への切り返しの技能が向上により、英語学習への抵抗感の減少、言語活動の活性化等、授業の流れがスムーズになった。
スモールトーク
トピクトーキング
クラスルームイングリッシュ
技能の向上

今後の課題・方向性

- ・英語による生徒とのやりとりの質を向上させ、言語活動を充実させて、生徒の英語力を育成することが課題である。
- ・コミュニケーションの土台となる6つの汎用的能力の育成を中学校の全教育活動及び小学校、高等学校との連携等を通して啓発していく。

現状の課題と課題解決のための手立て

- ・相手とのコミュニケーションを通して、自分の思いを伝えることに課題がある。
- ・表現の楽しさを味わい、コミュニケーション能力を伸ばす指導法を工夫する。

具体の取組の内容

1時間の学習の流れ (南小スタンダード)

- Greetings
- Sing
- About today
- Phonics
- Small talk
- Activity(games)
- Story telling
- Looking back
- Greetings



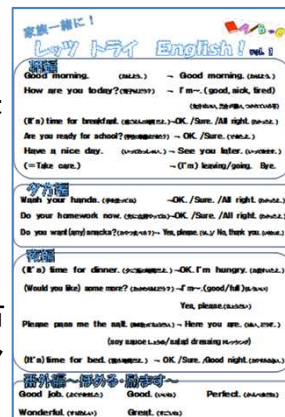
教材・教具の工夫と学習環境の充実

- クラスルームイングリッシュカードの作成
- 国際理解教室の掲示
- 階段を利用した掲示



家庭との連携

- 学年だより・HPでの情報発信
- レットトライ・イングリッシュ配布
- 英会話ワンポイントレッスン



各種研修会の実施

- 校内授業研究会
- 小中合同授業研究会
- 英語指導力研修会



成果①

- 児童の意識調査（5月、11月）
英語の学習が好きと答えた児童が8割を超えており、意欲的に取り組んでいる。英語を話すことや発表に関しては、3～5割の児童に苦手意識があったが、11月の調査では、低・中学年で改善傾向にあり、進んで表現しようという児童が増えている。英語を聞くことは、9割近くの児童が好きと答えているので、聞く活動をさらに充実させていきたい。
- 教員の意識調査（2月、12月）
昨年と比較してクラスルームイングリッシュを抵抗なく用いられるようになった。使用頻度も高くなり、T1で授業をする自信もついてきた。

成果②

- 英語に自然に親しむことができ、児童の意欲はとて高まっている。英語の時間が楽しみという声が多い。
- 英語に対する抵抗がなくなり、進んで表現しようという児童が増えている。
- 校内研修の充実により、教員の外国語指導に対する抵抗がなくなり、指導力も向上している。
- 保護者の声
 - ・ 中学校の英語と違い会話中心の授業で、子どもたちも楽しそうに取り組んでいる様子がとてもよかった。
 - ・ 小学校から英語を学ぶことで、英語検定への取組の堅苦しさがなく、楽しさの延長のまま挑戦できた。

今後の課題・方向性

- 5月と11月の調査の比較では、高学年で苦手意識をもつ児童が僅かに増えているが、今年度から週2時間になり、負担感や難しさを感じてきているのではないかと考えられる。
- 英語のシャワーをたくさん浴びせることによって英語に慣れ親しませ、楽しくコミュニケーションすることにつなげていきたい。
- 小学校と中学校の学習のつながりが不十分であるので、学習の系統性や年間指導計画の見直しを進める必要がある。
- 表現力の育成には、全教育活動を通した取組が必要不可欠である。外国語（英語）だけでなく、他教科でも共通課題として取り組まなければならない。

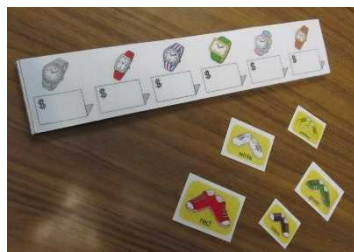
現状の課題と課題解決のための手立て

- ・英語で表現する(話したり書いたりする)ことに苦手意識があり、特に即興での表現を苦手とする生徒が多い。
- ・授業内外で英語による自己表現の場を多く設定し、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成する。

具体の取組の内容

○授業

- ・日常生活に近づけた場面設定でのActivity
- ・毎時間帯活動として行う Chitchat
- ・積極的な Classroom Englishの使用
- ・ペアワーク、グループワーク (教え合い、学び合い)



〈Activity教材の例〉

○授業以外

- ・昼休み、English roomを活用した英語教師とのTalking Time
- 各種研修会の実施
 - ・小中合同授業研究会、英語指導力向上のための研修会等への参加



〈ALTと会話を楽しむ生徒たち〉

成果①

○生徒の意識調査

- ・約80%の生徒が英語が好きと答えている。
- ・約70%の生徒が英語を話すことに抵抗がなくなってきたと答えている。

○テスト等

- ・以前は英作文で無解答の生徒が多かったが、自分の考えを表現できる生徒が増えてきている。
- ・英語検定を受検する生徒が30%増えた。

成果②

○生徒の変容

- ・与えられたテーマ(課題)で即興で英会話することに抵抗がなくなってきた。
- ・自然なリアクションをとる等、状況を考え、感情を込めた英語での表現が以前よりできるようになってきた。
- ・生徒が互いに教え合ったり、学び合ったりする姿が見られるようになってきた。

○英語教師の変容

- ・授業を見合い、指導法について熱心に協議する機会が増えた。

今後の課題・方向性

- 生徒はActivityに積極的に取り組み楽しんでいますが、実生活ですぐに使えるよう、より自然な場面設定を心がけていきたい。
- 既習事項を使った英語での会話に対する抵抗はなくなってきたが、書くことについては、スペリングミスなどの細かいミスが目立つ。定期的なテストに加え、授業内での観察・宿題の丁寧な点検が必要である。
- 英語が好きな生徒は多いものの、学力差には開きがある。授業内外で支援する場を設けていきたい。
- 知識技能の確実な定着と、4技能習得とのバランスのとれた指導を心がけていきたい。

平成30年度「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」～埼玉県立熊谷高等学校～

現状の課題と課題解決のための手立て

課題1 答えのない問いに対し自分の考えを英語で表現できる生徒の育成

課題2 他人の考えを取り入れることで自分（達）の考えを深め、最終的な答えを決定し英語で発表できる生徒の育成

手立て 埼玉県教育委員会及び東京大学大学発教育支援コンソーシアム推進機構CoREFとの連携による協調学習ジグソー法の実践、未来を拓く「学び」プロジェクトの一貫である研究開発員とマイスター教員による協調学習ジグソー法を使った授業のPDCAサイクルによる授業改善、年間を通したALTとの実用的な英語プログラム

具体の取組の内容

- 1 研究開発員とマイスター教員による協調学習ジグソー法を使った研究授業・研究協議を年間4回程度実施
- 2 生徒の活動・学びの実際の様子をビデオ等を活用し分析
- 3 生徒の成果物をプレ・ミドル・ポストの3段階で比較分析
- 4 クラスルームイングリッシュ、ユースフルイングリッシュ等の定型表現を用いた1分ペア英語会話を毎回実施

成果①

- ・ 自分の意見を英語で表現しようとする生徒の態度や姿勢の向上
- ・ 英語で相手の意見に賛成・反対し、またそれらを自分の意見と統合し新たな見解や理解を生み出す力の向上
- ・ 週4回のコミュニケーション英語Ⅱの授業で毎回英語で意見交換することで、8割以上の生徒が英語を使うことに抵抗がないと回答

成果②

- ・ 教員の授業中の英語使用率の増加：クラスルームイングリッシュ等を含む基本的な指示は8割以上英語
- ・ 生徒に考えさせる問いを取り入れる教員の増加、数多くの協調学習課題の共有と実践
- ・ 生徒が苦手とする技能の理解、それに当てた的確な手立て

今後の課題・方向性

- 1 協調学習を取り入れた授業の増加
- 2 教科書内容と関連しつつも生徒の興味関心を刺激する解の無い問いの設定
- 3 クラスルームイングリッシュ等の充実化と教員の英語による指示の増加
- 4 英語4技能を的確に評価する機会と評価規準の作成
- 5 大学受験英語指導と実用的英語指導との両立

現状の課題と課題解決のための手立て

- ・ 英文を読んだり、聞いたりして得た情報や考えたことを、伝えたり、表現する機会が少ない。
- ・ 英文の表面的な理解にとどまり、知識を関連付けて考えを深めることが十分でない。

具体の取組の内容

- ・ 埼玉県が平成22年度より推進している協調学習の手法である「知識構成型ジグソー法」による授業を定期的に位置づけ、授業見学や振り返りを通して、授業の改善に取り組んだ。
- ・ ICTの活用、教材の共有化を図り、生徒の学習の様子、教材の活用状況等を協議し、授業改善に取り組んだ。特に、協調学習で情報を口頭で伝えることがスムーズに進むよう、授業開始時の帯活動や、ペアワークにスピーキング活動を多く取り入れた。
- ・ 「知識構成型ジグソー法」による公開授業を実施した。実施にあたり、事前研究協議で参加者がワークシートに解答し、生徒の学びの様子を予測しながら授業を見学。授業後研究協議では、授業者のねらい、想定外の反応や改善点等についてご指導いただいた。特に「授業研究のための看取りの観点シート」を、3項目（本時特に育成したい資質能力、この授業の中で期待する資質・能力の発揮のされ方、資質・能力が発揮された姿の具体例）に沿って見積もりを作成したことで、授業者が振り返る際の基準となり、改善点が明確化された。
- ・ アクティブラーニング関連の書籍等を通じ、教科全体で意識的に授業改善に取り組んだ。
- ・ GTECの受検に取り組んだ。1年生8クラス全員4技能で受検・2年生8クラス全員3技能で受検
- ・ 英語検定受検者の増加に取り組んだ。

成果①

生徒アンケートより

- ・ 協調学習の授業では、伝達や表現のために主体的に読み、解答したという生徒は増加している。
- ・ 資料の英文も増加し、楽な授業ではないが、学期に1、2回はやってみいたいという生徒は減っていない。

クロストーク・プレポストライティングより

- ・ クロストークでの英語のスピーキングに抵抗が少なくなっている。
- ・ 記述の量が増え、内容も深まってきた。

成果②

教師の視点より

- ・ ジグソー法授業案作成を経て、問の質が高まり、問のバリエーションが増えた。
- ・ ジグソー法授業案作成の回を重ねるごとに、育成したい資質能力、期待する解答等が明確になり、評価の観点が多様になった。
- ・ 学年全体の英語の授業でジグソー法の授業案を共有した。
- ・ 研究協議に参加することで、生徒の学びの様子をみとることを意識するようになり、教材作成や指導のアプローチの改善につながった。

今後の課題・方向性

- ・ 授業の目的・目標の設定、内容をどう深めていくかが課題である。
- ・ 協調学習／ジグソー法の手法から、CLIL(言語内容統合型学習)へつながる道筋も考えられる。
- ・ 協調学習の頻度を増やしていくこと、評価を事前に明確することで、生徒の主体的で対話的な学びの定着を図り、英語力向上につなげられるのではないかと。
- ・ 主体的、協働的に問題を発見・解決していくための基礎となる、思考力・判断力・表現力を育成するため、アクティブラーニングの視点を取り入れた授業作りが求められる。